

からの反動、自由主義的潮流に対する嫌悪感が、如実に現われている。

フランス革命をフリーメイソンの陰謀に帰する主張から発展したフリーメイソン陰謀論も、ユダヤ陰謀論と同様の構造を持っている。革命の混乱は、旧来の秩序に満足している人々にはもちろん、そうでない人々にとっても、受け容れがたいものだっただろう。フリーメイソン陰謀論はこの混乱の「理由」と「敵」を明確に説明することで、人々にとって「理解」できるものに秩序立てた、ということができる。

比較的進歩的な知識人が集まったフリーメイソンは、ユダヤ人と共に近代の象徴となりえた。旧来の秩序を支持する人々が、彼らにとつて受け入れがたい社会変化と、その変化を象徴する存在たるユダヤ人およびフリーメイソンを同一視した結果生み出されたものが、ユダヤ陰謀論とフリーメイソン陰謀論である。

こうした陰謀論のフォーマットは、現代アメリカにおける、保守的キリスト教信仰に基づいた陰謀論に受け継がれている。それらはキリスト教を文明や秩序そのものと前提し、共産主義、無神論、リベラリズム、国際主義などを陰謀の産物として糾弾。伝統的秩序の擁護と国家、民族、人種の誇りや純粋性を訴え、古きよき「アメリカ」の防衛を主張する。

現代の陰謀論は、陰謀によって世界統一政府すなわち「新世界秩序」が目論まれていると主張する点から、新世界秩序陰謀論と呼ばれる。過去の陰謀論と比較してのその特徴は、第一に様々な陰謀を統合した巨大で複雑な陰謀のネットワークが想定

されている点、第二には世界が既に、ほとんど陰謀に支配されきっているとする点である。これらの特徴はグローバリゼーションの産物であり、その鏡像であるように思われる。複雑な陰謀のネットワークは、国家に限らず様々な政治主体が絡み合い不確実性を増す国際社会の情勢を反映している。また、上記の陰謀ネットワークが結局は統一された陰謀の意思によって動かされていること、および世界が陰謀に支配されきっているという想定は、自立性を増す社会システムに埋没し受動的存在に置かれる自己、「我々」ではない誰かが世界を動かしているという感覚、にもかかわらずその「誰か」の姿が見えないという事態において、世界を動かす主体を可視化する、世界を統一的に簡単に理解したいという欲求に応えるものだと思われる。

いったん成立したフォーマットは、換骨奪胎されつつ、その形式や内包された価値観を保持したまま、現代の陰謀論言説に受け継がれている。それは、社会変化の理由と責任を邪悪な陰謀に帰し、自己を正当化しつつ、認めがたい社会変化を説明可能とするための解釈枠組である。

共同体の紐帯

——イバード派イスラム思想におけるワラーヤの概念——

近藤 洋平

宗教における信仰は、個人の内的経験にとどまるものではなく、同じ信仰を持つ人間同士を連帯させ、一つのまとまった共同体を成立させる働きを持つ。この宗教共同体は、所属する構成員に帰属感覚とアイデンティティの基礎を与えるが、共同体

内ではさらに、同じ宗教的態度をもつ人びとがまとまり、一つの宗教共同体の中に宗派や集団が生まれるようになる。

イバード派は、スンナ派、シーア派とは異なる宗派である、ハワリージュ派にその起源をもつ分派である。イバード派は西暦八世紀半ば、イラクのバスラから各地に教宣集団を派遣し、信徒の獲得をすすめた。一〇数億人もの信徒を抱えるイスラームにおいては、一%にも満たない少数派であるが、現在でも北アフリカのリビアやアルジェリア、またアラビア半島のオマーンなどにいくらかまとまった数の信徒を抱える。

本報告では、このイバード派がどのようにして自派の共同体を運営し、また構成員間のつながりを維持・強化していたのかという課題について、ワラーヤ(関わりを持つこと)の概念を取り上げ、主として西暦八世紀末から一〇世紀の間に活動したイバード派の学者の見解の分析を通じて上記課題の解明を試みた。

一〇世紀の学者ビスヤウイーは、ワラーヤを「イバード派信徒を支援し、彼らを愛し、彼らへの中傷に反論し、敬虔と畏神で彼らを助け、彼らのために神に赦しを乞い、彼らに彼らの権利義務を認め、彼らを尊重し、彼らに敬意を払いつつ、関わりを持つこと」と定義した。またイバード派では来世における救済を保証する、神への信仰を「言葉・行為・意図」と定義するが、彼らは言葉や行為を、礼拝や巡礼など、神と人間との間の行為のみを対象とするのではなく、イバード派の信徒間での良い行いや良い感情をも対象とした。すなわち九世紀のムハンマド・イブン・マフブーブは「愛とは行為であり、神を愛すると

は、イバード派の信徒たちと関わりを持つことである」と説明し、ワラーヤの実践である構成員同士の肯定的な水平軸の関係は、神と人間個人の肯定的な垂直軸の關係に昇華するとした。ムハンマド・イブン・マフブーブのこの思想は、イバード派信徒を社会生活における善行や相互扶助に促す働きを持つ。

またイバード派のワラーヤを保持する者、すなわちワラーヤ(友)について、九世紀前半に活動したイバード派のある人物は、ある個人にとつてのワラーヤとは、①その個人をイスラームに呼びかけた者。イスラームの呼びかけをその個人が受け取ると、呼びかけた者はその個人にとつてのワラーヤとなる。②その個人がイスラームを呼びかけた相手。相手がその呼びかけを受け取ったとき、その相手はその個人に取つてのワラーヤとなる。

③ワラーヤとバラア(関わりを絶つこと)の判断の能力を有する者が、ワラーヤと認めた者。認定された者は、その個人にとつてのワラーヤとなる。以上のように分類した。ここではワラーヤは、呼びかける者と応答する者という直接的なやりとりとともに、イバード派共同体内にいる／いた、互いを知らない者同士の間でも成立するものと規定され、過去のそして距離的に離れた他のイバード派構成員と結びつくことを可能にする。

以上のことから、イバード派におけるワラーヤは、構成員にイバード派としての帰属感覚とアイデンティティの基礎を与え、また共同体の連帯の維持と強化を促すものとして捉えることができる。

(本報告は、二〇一二年度科学研究費補助金(研究活動スタート支援)の成果の一部である。)